

「あきらめない！」

少しを、次々と、時間内に

「できるを重ねる」

自信

平成31年3月4日
北九州市立木屋瀬小学校
校長 瀧上 正彦

1年間の子どもたちの成長に感謝します。ありがとうございました。

1年前の4月の子どもたちを振り返ってみると、みんな心も体も大きく成長しました。保護者の皆様に支えられながら、子どもたちが目標をもち、しっかりがんばってきたからだと思います。私が一番嬉しかったのは、子どもたちが毎朝しっかりと、感じよく挨拶をしてくれたことです。また、毎日の掃除も一生懸命してくれました。言葉遣いや授業にのぞむ姿勢もとてもよくなりました。

ご家族でも1年間を振り返り、子どものどこが成長したと感じたのか知らせて、共に喜んでほしいと思います。

補充学習始まる 2月から放課後毎日

2月から校時表を変更し、チャレンジタイムを昼から放課後に移動しました。また、4年生～6年生まで水曜日の6校時を追加しました。

5年生は、長い文章をしっかり読んで解く問題や、自分の考えを文中の言葉を使ってまとめる学習をしています。とても難しい問題ですが、最後まで粘り強く取り組んでいます。

宿題の忘れ物や課題のやり残しは、そのあとさらに残して取り組ませています。ご理解、ご協力をお願いします。

お別れ集会 3月1日(金)

学校HPに詳しく載せていますが、全学年児童によるお別れ集会が開かれました。いつも最上級生として手本となる行動を示してくれた6年生がいなくなることは寂しいですが、木屋瀬小学校で意識して行動したことを誇りにして中学校でも活躍してほしいと思います。卒業式は15日(金)です。

平成30年度修了式 3月22日(金)

今年も転出する先生方とのお別れを修了式後に行ないます。他校へ転出する先生方の氏名のみ、20日(水)にプリントでお知らせします。転出先と転入者については4/1の新聞発表となります。

火おこし体験3年 14日(木) 昔遊び体験1年 21日(木)

地域のおじいちゃん、おばあちゃんに来ていただいて、炭火の火おこしや、けん玉やお手玉など昔の遊びを教えていただきました。寒い中、ありがとうございました。詳しくはHPに載せています。

※ 学校HP(ホムページ)まもなく6万件アクセスです。たくさん読んでいただきありがとうございます。

4月行事予定

- 5日(金) 着任式・始業式
- 9日(火) 中学校入学式
- 10日(水) 小学校入学式
- 11日(木) 給食開始
- 18日(木) 全国学習状況調査6年
- 20日(土) 学習参観・PTA総会
- 22日(月) 1年生給食開始
- 22日～26日 家庭訪問
- 27日(土)～5月6日(月) 10連休
- 5月26日(日) 運動会



シリーズ 子育て応援 ～校長の独り言～

子育ての危機管理能力を高める

子どもを守る10の法則 元警視官宇田川信一より

最近、今までにない凶悪事件が増えています。そして、それは以前のようにどうしようも無い状況におかれた者が、やむなく起こすという色彩ではなくなってきました。

さらに、こうした事件は単に「キレる」などの衝撃的反抗ではありません。いずれも冷静に考えた「計画的犯行」です。事前に何回も「カッター」となるなど、繰り返し同じ感情が生じた結果「いつやる」「どうする」と考えて決意したことが多いのです。

さて、こうした犯罪を止めるにはどうしたらよいのでしょうか。上記したようにこうした事件には予兆があり事前に見抜くことができるはずですが。親や教師は、その「予告兆候」を決して見落とさないよう、日頃から子どもと十分に触れ合い、対話することが必要です。

数多くの非行少年に接してきた宇田川さんは、子どもたちは大人に話を聞いてもらえなかった不満や不信感を訴える子が多いと言います。また逆に子どもも、人の痛みを知り、相手の話を聞く姿勢が持てない子どもが目立つようになってきたと言います。「共感と信頼」が失われているのです。

子どもに接する親や教師は、常に子どもの痛みや迷い、苦しみ分かる「共感能力」を身に付けなければなりません。この「共感」とは決して甘やかしてではありません。

親は子どもを厳しく管理したがるものです。しかし、親でも子どもの「心」まで管理することはできません。親ができる管理は、子どもの「自主性」や「積極性」を引き出す刺激を与えることです。この刺激は、「共感と信頼」によってしか得させることはできません。

「お前はやる気のない奴だ。何回言ってもダメな子だ」という非難は親の自分勝手な感情を浴びせたに過ぎません。言われた子どもは、ショックを受け本当にやる気を失います。

子どもが自信を無くす原点は、親が期待する理想の子ども像を描き、できていない点ばかり指摘することです。子どもはやがて自分が嫌になり、肯定できなくなります。

子どもの「心」を癒すのは、「共感できる他者の存在」です。親だからと、常にお説教になってはなりません。親は愛情をもって、自分を犠牲にしても温かく包み込む。「知ってやり」「見てやり」「待ってやる」のです。その心情が子どもの共感を生み、やがて「自信」を築きます。親自身も、耐えて、鍛える努力をしてほしいのです。こうした、親が子を思いやる「温かい対応」が子どもの「心」を呼び起こし、他者を思いやる心「危機管理能力」を高めていくのです。